

# オンラインによる模擬授業演習から得られたもの

## — 学生の省察をもとに振り返る —

松井 孝夫

### はじめに

本稿の目的は、本学の教職課程を履修する大学生が、オンラインによる授業を受講する中で、どのようにして模擬授業を実践演習してきたかを筆者が振り返るとともに、学生の省察から、学生らがどんなことを学び得ることができ、いかなる課題を見つけられたかを明らかにしていくことで、今後の授業改善に生かしていこうとするものである。

### 1 オンライン授業に至るまでの経緯

聖徳大学音楽学部では、令和2年度新学期を迎えようとする中、新型コロナウイルス感染症に関する対応について、教職員ともども先が見えない状況に大きな不安を抱いていた。情勢が刻々と変化する中、さまざまな状況に対応できるよう「授業開始への対応について」の文書が音楽学部長補佐より提示された。(令和2年4月1日)それが以下1-1の内容(要約している)である。

#### 1-1 授業の運営についての基本的な考え方

- ①講義科目は、遠隔授業を含め全学の方針に沿って行う。
- ②実技科目は、現時点(令和2年4月1日)では授業開始週の初回の授業では短時間のオリエンテーションのみを対面で実施し、対面レッスンなどについては、安全面を考慮して、基本的にゴールデンウィークの連休明け(5月8日)から開始することとする。
- ③安全対策は、「音楽学部新型コロナウイルス感染防止ガイドライン」に沿って対策を行う。  
(令和2年4月1日、学部長補佐通知文より)

#### 1-2 授業の方法に関する基本的な考え方

1-1の考え方に則って、

- ①講義系、座学系の科目は、基本、遠隔授業で行う。
- ②実技系の科目は、対面か遠隔かの判断については研究室に一任される。その中でも個人レッスンについては、対面で実施される場合は、感染防止ガイドラインに沿って安全に最大限の注意を払うことができたなら実施することとした。

一方、合唱や合奏のワークショップなど集団で行う実技授業については、当面、座学で様子を見る。また、8月～9月の間に柔軟な集中講義で対応する等の対処法が提示された。

### 1-3 オンライン授業の方法と準備

レッスン系科目には、Zoom、LINE、Skypeなどを用いたリアルタイム遠隔レッスンがその授業方法として例示された。一方、講義系、座学科目では、リアルタイム式とオンデマンド式の2通りの授業方法が例示された。のちに、全学的には、同時配信式にはTeams、オンデマンド式にはMoodleが推奨されることになるが、この時点ではその名前が挙がらなかった。

また、学生への連絡方法については授業ごとの連絡網を作成し、メールやラインなどを通じて相互の意思疎通がしっかり図れるよう心掛けた。

### 1-4 音楽学部コロナウイルス対策ガイドライン (第1版)

本学音楽学部において、全学のガイドラインに従いつつ、学部独自のガイドラインを設定し感染防止に努めることを文書にて10項目にわたり提示された。ここではその詳細については割愛する。

### 1-5 オンライン授業の開始にあたり

以上のような体制をとる中で、5月8日よりオンラインによる授業が始まった。学生の学習を何よりも第一に考え、教員はオンラインという方法にとらわれすぎぬように進めていくことである。あくまでも教員がオンラインで授業を行うことが目的ではなく、学生が学習してそれぞれの科目の目標に到達することが目的であるということを肝に銘じて、教授内容の整理に努めていくことが肝要であることを再認識した。

## 2 模擬授業演習に至るまでの学びの過程

この章では、音楽科教育法Ⅰの授業において、学生一人一人が、模擬授業演習を実践するまでにどのような学びを経てきたか、その過程について記述していく。尚、通常1セメスターにおいては15回(90分)行う規定となっている授業であるが、コロナ感染予防のため緊急事態宣言が発出され、大学の臨時休業が要請されたことにより、4月はオンライン授業のためのフィールドの整備や準備等に時間が割かれ、授業を実施できず、5月からスタートする運びとなったため春学期の授業回数は12回で行うこととなった。

### ① 音楽科教育の意義を知る

まず初めに「音楽科教育と音楽教育との違いは何か」という問いに対して、その内容、意義についてあらためて考えていった。「普通教育としての音楽科教育」と「専門教育としての音楽教育」の相違点を理解していく中で、それぞれの特徴について迫っていった。

### ② この授業のゴールの確認する

教職課程を俯瞰的にとらえるために、大学2年春学期から3年秋学期まで4期にわたって行われる音楽科教育法は、教職課程の中核をなす科目としてⅠⅡⅢⅣを履修していくことの意義とその概要について確認をした。

### ③ 教育とは何かを問い直す

「教育とは何か」という問いに一人一人が向き合い、学生が自分なりの答えを根拠を

もって導きだし発表することで、その考えを確かなものにするとともに、他の学生の意見や考え方を聞くことで、さらに思考を深めることができた。

#### ④ 中学校音楽科の目標(新・学習指導要領)を読み解く

新・学習指導要領の目標の柱書に書かれている内容である「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。」を具現化するための3項目(1、生きて働く 2、未知の状況に対応できる 3、学びを人生や社会に生かそうとする)が、評価規準の項目(「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」)にどのような形でリンクするのか、さらに「学力の三要素」や「生きる力」というキーワードがどのような関連性をもって変遷してきたのかを読み解いていった。(斎藤 2020: 16-19)

#### ⑤ 音楽科の指導内容について学ぶ

音楽科の指導内容は、「A表現」「B鑑賞」の2つの領域及び[共通事項]で構成されている。そのうち「A表現」には歌唱、器楽、創作の三つの分野がある。それらは指導内容に示されている事項を領域、分野別に、資質・能力の観点で整理されていることを学んだ。また[共通事項]の取り扱い方や指導計画の作成についても理解した。

#### ⑥ 学習指導計画の意義や特徴を概観する

学校教育とは、教育の目的や目標を設定し、それを達成するために意図的、計画的、組織的に行われる営みであり、教師は音楽授業を系統的に、また発展的に展開するためには綿密な指導計画が欠かせない。そこでカリキュラム(教育課程)を踏まえた指導計画が必要になってくることを理解した。

#### ⑦ 評価の意義を知る

教育評価の意義を考えるうえで、目標に対して行うものと規準を用いて行うものがあることを学ぶ。また教師自身と生徒のために行うものもある。このようにいろいろな尺度での評価があることを認識した。(宮下 2020: 32-35)

#### ⑧ 観点別学習状況の評価を理解する

題材の目標を作るために、「観点別学習状況の評価」の理解が必要である。そのため「授業の構想→計画→作成→評価方法の決定」というプロセスの4コマ漫画を提示し、題材の目標作成のための手順を示した。そのうえで、表現、鑑賞の領域ごとの評価規準作成のルールを示した。どちらの領域も次の3観点(1、知識・技能 2、思考・判断・表現 3、主体的に学習に取り組む態度)において生徒の学習状況の評価するよう授業を組み立てていく必要があることを確認した。

#### ⑨ 教員のデモンストレーション(模擬授業)をもとに学生が「学習指導の組み立て」を構想する。

学生の模擬授業は、一人20分で行うこととし、A4版の書式に沿って、教材→題材名→指導内容→題材の目標→指導の流れの説明をしたあとで、題材のどの部分(何時間目)をどのような設定で行うのかを伝え、模擬授業に入る。

一度、フォーマットに沿って教員がデモ授業をして全体の流れを掴んだところで学生が実践するよう企画した。

#### ⑩ 学生による模擬授業の実践

学生の模擬授業は、歌唱、器楽、創作、鑑賞の4つの分野、領域に分かれて行われた。基本的には教科書に掲載されている題材を使って授業をすることになった。コロナ禍のため、本来なら新しい教科書を購入することになっているのだが、それができない状況なので、学生が中学時代に使っていた教科書をもとに模擬授業を実践した。

#### ⑪ 模擬授業の相互省察

「論より証拠」ということで、まず学生が教師の側に立って実際に模擬授業を実践してみること、たくさんの気づきを得ることができた。それと同時に、自分以外の学生の模擬授業を受けることで、客観的な授業洞察が深まっていく。まさに「人のふり見て、我ふり直せ」ということわざの通りである。自己理解と他者理解を通して、次に何をすべきかを自ら学ぶことができるのである。

★以上の①から⑪の過程において、音楽科教育法という科目を初めて履修する学生(大学2年)は、模擬授業を通して、教える側の立場となって授業する上で最低限必要なさまざまなことを自ら習得していくのであった。

### 3 学生によるオンライン模擬授業の実際

#### 3-1 歌唱の授業

オンラインによる交信授業では大学の規定により Teams というコミュニケーションツールを使った。そのため、履修学生13人のうち常時画面に映るのは9人ということではあったが、学生が発言するたびに容姿が現れ、声や顔の表情などによって概ね反応の様子がお互いに読み取ることのできる状況であった。そのような中、学生たちは互いに意思疎通しながら模擬授業演習をスムーズに進めていくことができた。

歌唱分野における3人が実践した授業の題材は、

- 1、「歌詞の情景を思い浮かべ、表現を工夫して歌おう」
  - 2、「サンバのリズムに乗って、生き生きと歌おう」
  - 3、「曲に込められている意味を理解して歌おう」であり、
- それぞれの教材は順に、1、「夏の思い出」2、「風になりたい」3、「春に」となっている。

1の題材では、「曲を一度聴く→階名で歌う→歌詞をつけて歌う→歌詞に込められた思いと作者の紹介→歌詞の朗読(全員で)→歌唱のポイント解説→全員で斉唱」という流れであった。オンライン上であっても、発問に対してスムーズなレスポンスがなされた。情景を思い浮かべられるよう写真など視覚的な教具などが共有できれば尚よかった。学生は、生徒に深く考えさせることができる発問の重要性をあらためて実感でき有意義な授業となった。

2の題材では、「原曲を聞く→音取りをする→サンバのリズムの説明→サンバを実際に叩く→サンバのリズム叩きと同時に歌う→小グループで打楽器を使いながら練習をする→



グループごとに手拍子足踏みなど加え創意工夫する→発表→相互に評価しあう」という流れであった。オンライン上であったために授業者である学生が各グループの様子を見て助言することができなかったが、全体に対する指示は的確に行えていた。その理由として授業の「準備」がしっかりできていたからである。そのことにより、学生は準備の大切さをあらためて認識できた。

3の題材では、「曲の音源を聴く→歌詞に出てくる登場人物の心理を読み取ったり、音楽がどんな場面を表しているのかを考えたりして、曲に込められた意味を想像する→ワークシートに沿ってグループで意見交換→意見交換のまとめ」という流れであった。本来、パートに分かれ音取りをしたいところであるが、オンライン上でパートごとに音取りすることは少々難しいので、歌詞の解釈に重点を置いた内容となった。ただ歌う活動をまったく行わないと国語科の授業のようになってしまう。そのようなことにならないように、実際に音楽室で授業を行う場合は、歌う時間と言語活動させる時間のほどよいバランスを考えて授業設計する必要があるということを確認した。

### 3-2 器楽の授業

歌唱の模擬授業でも経験したが、みんなで同時に音楽を奏でるとタイムラグが生じてしまい、きちんと合わせるのは至難の業である。器楽においても同様にリコーダーの合奏をやろうにもカノンのようにずれてしまうので、そこは仕方ないこととして相互理解して、合わせて演奏したという体で進めていく形で模擬授業は進められた。

器楽分野における3人が実践した授業の題材は、

- 1、「相手の音を聴きながらリコーダーを吹いてみよう」
- 2、「リズムに親しみ、アンサンブルの楽しさを知ろう」
- 3、「箏の出す音を感じ取り、歴史と奏法を知ろう」でありそれぞれの教材は順に、1、「シチリアーナ」2、「打楽器のための小品」3、「さくらさくら～主題と変奏」となっている。

1の題材では、「アルトリコーダーの音階練習、指使いの確認→楽譜の主旋律にラインマークをする→レガート奏法やタンギング奏法の違いを体験し理解→A1パートをみんなで合わせる→A2パートをみんなで合わせる→隣の人とペアになって2重奏の練習→クラスを半分に分けてそれぞれ発表」という流れであった。オンラインでの授業なので実際には合わせて演奏することもままならないので、それぞれの項目を実践したという設定で進めていった。この活動を通して、指導の順序性の大切さ、個に応じた指導の必要性について、学生が実際に授業をやってみることで気づくことができる機会となった。

2の題材では、「参考音源を聴く→最初の4小節(6パート)のリズム打ち確認→打楽器の奏法と音色の関わりについて説明→グループ分けグループ活動→発表→相互評価」という流れを計画した。模擬授業では、ワークシートを使って丁寧にそれぞれの楽器の特徴と奏法の注意点をレクチャーした。ワークシートなどの授業準備がしっかりできていることにより、教える内容がきちんと整理整頓されるとともに、次に何をやったらよいかという手順が一目瞭然となるため、生徒は学習により取り組みやすくなることを実践を通じて

実感できたようだ。また学生自身がラテンパーカッションの楽器に通じているという利点があることにより、生徒にそれらの魅力を伝えられる源となっていた。

3の題材では、「導入で八つ橋菓子を見せ、名前の由来から歴史などについて解説→箏の各部首の名称、座り方、奏法、流派などについて説明→「さくらさくら」をペアで交互に練習(演奏に合わせて弾いていないものは歌う)」という流れであった。生徒の興味・関心を引く工夫をしながら模擬授業を進めていた。単発で終わる授業にならず中学校3年間を見通しての学習の積み重ねを考慮して計画することが望ましいということに授業者は気づきを得た。また箏を題材に器楽のみならず、鑑賞、創作、歌唱の分野においてもスパイラルに扱うことで、より深い学びが得られるということを再確認した。

### 3-3 創作の授業

創作の授業は、学生自身の中高時代に、そう多くは経験してきていないということで、模擬授業に入る前に筆者は学生に対してリズム創作のワークショップをオンライン授業の中で行った。創作というとたいそうな旋律を作りハードルが高いイメージがどうしても拭えないが、学生はリズムを組み合わせ構成していくことで簡単に創作できるということを実感した後に模擬授業を計画していったため柔軟な発想で構想することができた。

創作分野における3人が実践した授業の題材は、

- 1、「和音をもとに旋律を作り、リコーダーで演奏しよう」
- 2、「日常の気持ちからリズムアンサンブルをしてみよう」
- 3、「曲のイメージを自由に考えて、それに合ったリズムをたたいてみよう」であり、それぞれの教材は順に、1、「パッヘルベルのカノン」2、「Let's Create！」3、「アルプス1万尺」となっている。

1の題材では、教科書教材にあるパッヘルベルのカノンの和音進行を用いてリコーダーを吹きながら即興的にあてはまる音を探しながら旋律をつくっていく活動である。学習指導要領との関連でいうと、音のつながり方の特徴や音の重なり(和音)を意識して作っていく作業となる。学生は中学生の気持ちになって節づくりに真剣に取り組んでいた。

2の題材では、「嬉しい」「悲しい」のような気持ちを表す言葉をリズム音符で表して2小節のリズムを作ろうというものである。オリジナルのワークシートにいくつかの工夫が施されていて、楽しく学習できるようにアレンジされている。生活や社会の中の音や音楽と結び付けて学べる内容であった。

3の題材では、曲のイメージを自由に想像し、それに手拍子や足踏みを自由に加えて創意工夫をもってアレンジしていくものである。「アルプス1万尺」は軽快なアメリカ民謡でシンプルな曲であるがゆえに、リズムや速度、強弱など、いろいろな工夫を施すことができる。グループ活動からクラス全体での活動へと展開していく計画であった。

### 3-4 鑑賞の授業

オンラインにおける鑑賞の授業は、事前に何の曲を鑑賞するかを全体に連絡し、グループLINE上に鑑賞曲のURLを貼り付け、聴いてもらったうえで授業を進めていった。

今後日本では、GIGAスクール構想により児童・生徒一人に1台端末をという時代が来ることを見据えて、各自がタブレットの代わりにスマホを使って鑑賞の授業を進めていった。

鑑賞分野における4人が実践した授業の題材は、

- 1、「音楽と物語 ― 歌、ピアノ、詩が一体となって作られる音楽」
- 2、「詩と音楽の関わりを知覚・感受し味わおう」
- 3、「オペラとミュージカルの違いを見つけよう―それぞれの良さを楽しもう」
- 4、「変奏曲を知り、曲想の変化を味わおう」

であり、それぞれの教材は順に、1、2、ともに「魔王」3、「レ・ミゼラブルから民衆の歌」4、「キラキラ星変奏曲」となっている。

1と2の題材では、どちらも教材に「魔王」を選んだ。

同じ鑑賞の授業でも、授業者が変わればその切り口も変わるだろうということで、あえて同じ教材で模擬授業をやってもらうことにした。どのように工夫したら、生徒が主体的・対話的で深い学びを得られることができるか、考える機会となった。また有効なワークシートの作り方や鑑賞曲の紹介文を生徒が書くことで発信型鑑賞ができるなど実際に授業を試みることで有意義な気づきが得られた。

3の題材では、ミュージカルを柱に鑑賞する一方、既習のオペラ(ヴェルディのアイーダ)との相違点を見つけるという活動も取り入れていた。総合芸術ということで、教えた内容が多岐にわたっているので、ポイントを絞ってきちんと指導すべき内容を整理する必要があることを授業者は確認した。

4の題材では、変奏曲の鑑賞を通して、多様な音楽性を吸収し、音楽の知識を身に付けられるよう、工夫が凝らされたワークシートを通して説明していた。鑑賞授業はややもすると一方通行の授業に陥ってしまうものである。いかに生徒に能動的に音楽に向き合わせるか考慮の必要がある。そのうえで発問や促しを通して生徒に発言させる場面を適度に作りながら「思考・判断・表現」できる環境を作っていくことが大事であることに学生は気づいた。

#### 4 オンライン模擬授業の省察(学生の振り返り)

この章では、学生がオンラインでの模擬授業を実施した後の省察から見てきた成果と課題等の記述のうち4つの分野、領域(歌唱、器楽、創作、鑑賞)から一つずつ抽出したものを掲載する。そこに綴られていることの共通項目をとらえて、今後の授業改善へとつなげていきたい。

##### 4-1 歌唱授業の省察から(Aさん)

(良かったこと)

私が行った歌唱の模擬授業では、一方的ではなく、みんなに発問をしながら授業を進めることができ、教材研究をしっかりと行うことができた。発問をしないと、どうしても生徒が受け身の授業になってしまう。そのため、歌詞の意味を考えたときや、曲について

説明をするときなど、様々な場面で生徒に発問をし、考えを聞くことで生徒が主体の授業を行うことが大切だと思った。また、教材研究をしっかりと行うことで、生徒の興味を引き付けることができたり、生徒からの質問に柔軟に対応することができるため、教材研究をしっかりと行うことも大切だと思った。

(改善点)

発問をしながら授業を進めることができたり、教材研究をしっかりと行うことができた反面、サンバのリズムを説明するだけで終わってしまったことや、使う楽器の数が限られているのに、そこを考えられていなかったことが改善点にあげられる。今回のような特徴的なリズムを扱う場合は、説明だけではなく、リズムに言葉をつけたり、実際にリズムを叩かせるといった活動を取り入れようと思った。また、楽器を使う際は、どのように楽器を生徒に割り振るかや、練習の仕方などを考える必要があると思った。

そして、ほかの人の模擬授業を受けてみて、気づいたことが3つある。

1つ目は、導入についてである。授業の導入で生徒を引き付けることは大切だと思った。生徒を引き付け、興味や関心を持たせることで学習に意欲的に取り組ませることができる。そのためには、生徒の身近なことや、興味のありそうなもの、日常に関連するものを絡めるなどということをして導入を行うことが効果的ではないかと考えた。

2つ目は、話す言葉についてである。私たちは音楽を専門に学んでいるため、気づかないうちに専門用語を話してしまうことがある。しかし、中学生にはそれらの専門用語は伝わらない。そのため、授業を行う際は、専門用語などの難しい言葉を言わないように気を付けながら、それらを分かりやすく噛み砕いて話すことが大切だと思った。

3つ目は、生徒の視点で授業を考えることの大切さである。これは導入や話す言葉についてもいえることである。生徒の視点で授業を考えることで、おのずと発問計画が浮かんだり、生徒を引き付けるためにはどうしたら良いのかや、話すときに使う言葉をどうすべきなのかなどが考えやすくなると思った。そのため、これから授業を考える際は、自分が生徒の立場になって授業を考えようと思う。

(今後の課題)

今回の模擬授業を通して、オンラインのため難しい部分もあったが、様々なことを学ぶことができ、自分の課題を見つけることができたなど、とても良い経験ができた。今回の模擬授業の経験を生かして、次回以降の模擬授業を行っていきたいと思う。

#### 4-2 器楽授業の省察から (Bさん)

(良かったこと)

今回の模擬授業を振り返って、良かったと思う点は2つある。

1つ目は、模擬授業への準備がしっかりとできていたことだ。まず、学習指導案を書く際に、どんな内容をどんな順番で教えると、生徒に伝えたいことが伝わるのだろうか、と考えた。その上で、何が必要か、どんな活動を取り入れるべきなのかを考えることができ、当日は授業をスムーズに進めることができた。授業をするにあたって、準備することが

いかに大切かを知ることができた。(中略)

2つ目は、授業内での問いかけや誘導ができたという点だ。これは、模擬授業を受けていた学生から言われて気づいたことだ。例えば、今回の授業のように、生徒同士で話し合う活動を取り入れたとしたら、話し合う内容やポイントを指示しても生徒の話し合いが進まなかったり、うまく指示が通っていなかったりする場合があると思う。生徒が困惑していたり、活動がなかなか進まない時は、その様子を察して助言したり、うまく誘導していくことがスムーズに授業を進行するコツだと思った。

(改善点)

模擬授業をやったの改善点は、3点ある。

1つ目は、授業の説明の中で、中学生にとって理解が難しいと思われる言葉を使っていたことだ。例えば、「和声」や「強拍」などの音楽を専門的に学んでいる人にとっては日常的に当たり前を使う言葉であっても、中学生には説明を加えてあげなければ理解できないままその授業を聞くことになるということを改めて認識しました。自分の中で気をつけてはいても、無意識に専門用語を発してしまうことがあるので気をつけたいと思った。

2つ目は、休符の存在を意識する必要があるということだ。今回の授業では、休符についての指示をするのを忘れてしまった。楽譜上の音がある部分だけではなく、休符も含めて曲ができていたので、そのことを念頭において指導していくことが必要だと思った。

3つ目は、グループでの練習や発表の時に基準となる拍をとった方が良いという点だ。今回はオンラインという点でその辺りは重視していなかったが、実際に対面でやるとなった時には、拍を刻んでおいた方が生徒は合わせやすいと思った。

(今後の課題)

自分が実際に授業をやって、他の人の授業を受けてみて一番感じたのは、教えるには話し方がとても重要になるということだ。話すスピードや声のトーンなどが違うと、内容の伝わり方も異なることに気づいた。(中略)伝えたいことをだらだらと文章で書いても伝わらないのと同様、もしくは、それ以上に言葉で伝える場合には端的に大事なポイントだけを伝えるように意識することが必要だと思った。中学生を対象に授業をする場合、生徒は、集中して聞いているとは限らない。文章の中に大切なポイントをいくつも盛り込んでも、その内容はおそらく覚えていないだろう。授業だからこそ、大切なことを伝える場合には生徒の注意を引き、ポイントだけをまとめて話すといいと思った。最後に、授業で生徒の興味を引くのに重要なのは、「導入」の部分であることがわかった。導入部分に生徒が興味を持てる工夫をすることで、授業全体の集中力も変わってくると感じた。

#### 4-3 創作授業の省察から (Cさん)

(良かったこと)

1つ目は、学習指導を組み立てる際に、授業をイメージしながら作業を行うことができたこと。

2つ目は、模擬授業前日に、どのように授業を展開していくのかについて考え、詳しく



まとめたことで、当日にスムーズに授業を行うことができたこと。

3つ目は、カノン進行について生徒が理解しやすいように、実際にピアノで弾いて聞かせたり、みんなが知っている J-POP にも用いられていることを伝えるなどの工夫ができたこと。

(改善点)

以下の3つの点において今後改善していきたい。

1つ目は、説明が難しくなってしまったため、初めて学ぶ生徒にも分かりやすいようにできるだけ簡潔に伝えることを心がける。(いきなり難しい専門用語を話すことはしない)

2つ目は、旋律の創作を行う際に、よい例だけでなく、悪い例を挙げながら説明するようにすると理解が深まる。

3つ目は、常に生徒の目線になり、どのような指導のしかたをすると良いのかを考える。  
(今後の課題)

以下の課題を今後解決していけるよう取り組んでいきたい。

1つ目は、授業や試験において2回ほど学習指導案を作成したが、慣れていないこともあり、作業を行う時間がかかなりかかっていると感じたため、これから回数を重ねていき、作成に慣れていこうと思う。

2つ目は、音楽科の知識について曖昧なところもあるため、授業で用いた教科書や中学校の教科書などを読み込み、知識を身に付けていくと同時に、その用語の意味も簡潔に説明できるようにしていきたいと思う。

そして何よりもPDCAサイクル(P=計画、D=実行、C=評価、A=改善)を実践して模擬授業を重ねていきたい。

#### 4-4 鑑賞授業の省察から (Dさん)

(良かったこと)

ほかの人が実践する授業を見て、学んだり、取り入れたことを以下、記します。

1つ目は、物怖じせずに堂々と授業ができた。

2つ目は、導入を短く簡潔にし、発問をもとにして生徒の興味を引かせる工夫をすることができた。

3つ目は、難しい内容はわかりやすく噛み砕いて説明すること。また、説明は生徒を飽きさせないように短く簡潔にまとめるよう心掛けた。

(改善点)

今後、模擬授業を実践する中で以下、4つの改善すべきことを示す。

1つ目は、教師の話し方や表情一つで、生徒の興味を引くことができることを知ったので工夫していきたい。

2つ目は、写真などのビジュアル情報を用いて説明することで生徒のイメージをより膨らませていきたい。

3つ目は、説明の合間に発問を入れていくことで生徒により考えさせる指導をしていきたい。

4つ目は、生徒の思考力を養うのに効果的なワークシートを作成していきたい。

(今後の課題)

今回、オンラインで模擬授業をやってみて今後につないでいきたいことは以下の3つである。

1つ目は、生徒が理解できているのか常に注意を払いながら授業を進め、詰め込んだ授業内容にしないこと。

2つ目は、何でもすぐに教師が正解を言わないで、生徒に考えさせる時間を与えることが大事だということ。

3つ目は、「スピーディに、わかりやすく、楽しく」をモットーに授業をすること。

(聖徳大学音楽学部令和2年度春学期教職課程履修生：オンライン模擬授業の省察レポートより引用)

★以上4-1～4-4で掲載した学生の省察からは、音楽科教育法Ⅰの講義前半の指導過程において学んできた基礎・基本を踏まえて学生自身で授業を構想し、実践する中で、多くの気づきを得られたことが読み取れる。そこにはまた、自らの手で授業実践してみて初めて気づくことも多々あり、一方で他の学生の模擬授業を客観的な立場になって受けて、新たに視野を広げることもあり、さまざまな側面から授業というものを見つめ直すことにより、数多き学びを得ることができたのではないだろうか。さらに、音楽を実技指導する上では、タイムラグが生じ融通の利かないオンライン環境の中であっても、指導実践にあたって留意すべき点をしっかりと掌握して模擬授業をできたことは、次の段階へとつなげる一つのステップになったのではないだろうか。この学びを礎として音楽科教育法Ⅱ、Ⅲ、Ⅳにおいて、学生はさらに幅広く教材研究等の裾野を広げるとともに、経験を積んで、たくさんの知識と教授法を習得していくことが望まれる。

## 5 省察のまとめと今後の課題

### (対面授業とほぼ同等の学びが得られた)

オンライン授業を実践した学生の省察からは、「教材研究の大切さ」「ワークシートの有効的な活用」「教師の惹きつける話し方」「授業準備を万端に」「発問の工夫」「生徒目線を大切に」「短く簡潔に話す」「導入の重要性」「生徒主体を生かす」「褒めることの有用性」といった授業する上で留意すべきポイントがおおよそ共通して記されていた。このような内容の指摘は、例年、音楽科教育法Ⅰで行っている対面による模擬授業の省察とほとんど変わらない同等の学びを得ることができたのではないかと筆者は振り返る。

### (互いに歩み寄ることで困難を乗り越えられた)

学生は、オンラインの特性を察しながら、手探りの中で模擬授業の実践を行った。そして、授業者学生の働きかけに対して生徒役学生がしっかりと耳を傾け、歩み寄り、学びを共有しようと努める姿勢があったからこそ、多くの気づきを得られたのではないかと推察される。当初オンラインでの模擬授業はきちんとした形では成り立たないのでは

ないかという懸念をしていたが、それを払拭するかのように、ピンチをチャンスに変えて、学生たちの学びや気づきは、授業する上での留意すべきポイントをおおよそ網羅するものとなった。

#### (オンライン授業では難しいこと)

一方で、対面授業でできて、オンライン授業ではやりにくいことは当然ある。たとえば、模擬授業を展開していく中で、一つの発問に対して、生徒の反応がどう返って来るかによって授業の展開がその都度脈々と変化する。その変化に授業者は臨機応変に対応していきたいところであるが、Teamsでは全員の顔を伺うことは困難であり、ややもすると、教師の一方通行の授業に陥りがちとなる。本来、音楽科の授業は、教師と生徒が双方向に對話・交流する中で進めていくことが望ましい。オンライン授業では、生徒の「つぶやき」や「ささやき」を拾って、そこから授業を展開していくような臨機応変な対応や余裕のある受け答えが思うようにできなかったため、教室で行う授業のような相互にやり取りする中で深まっていく、学びある演習にはあと一歩及ばなかったが、そんな中でも学生たちは前向きに取り組んでいた。

#### (問題を解決するための対処法)

教室で行う授業の雰囲気を作るための工夫として、次のような方法が考えられる。Teamsの画面では9人まで顔が見られるので、質問を投げ掛けた後に指名して当てた生徒と画面に映っている他の8名の生徒らと交流する中で相互に對話を広げ、授業を促進していくことが可能となる。さらに、画面に顔が映っていない生徒を指名して意見してもらえばその都度、顔が映し出されるのでそこで對話を促し、授業を活性化の一助ともなる。無論、実際の教室で行う授業の臨場感こそ味わえないが、先生役のみならず生徒役に扮する学生の演出(つぶやき、ささやき、顔の表情など)次第でそれなりに対面に近い形で授業を進めることができるであろう。これらを実現できるよう学生に働きかけることが今後の課題である。

#### (オンラインだからこそその学び)

学生の模擬授業実践やその省察文を通して、オンライン授業だからこそそのよさが推察できた。それは、対面授業にもまして、学生が自分自身とより向き合うことができ、一つ一つの課題に当たっていくチカラを着実に身に付け、育んでいくことができたという点である。対面授業では、「主体的、対話的で深い学び」を得るためのアクティブラーニングがグループワークなどを通じて集団の中で展開されていくが、オンライン授業では、自宅で一人でパソコンに向かっているので、自分自身との對話を通じて考えを深めていく場面が必然的に多くなっていた。そのことによって一人一人が思いや意図をしっかりと持って、授業を主体的に考えて実践する機会がより増えたのではないかと思う。このように、他者との對話のみならず、自己との對話がより深められるのが、オンライン授業の特質ではないかと再認識した。

## おわりに（成果と展望）

コロナ禍の中、初めてのオンライン授業を春学期を通して行ってきたが、実際に取り組んでいく中で、パソコンの不具合や通信障害などにより、交信しづらい場面もあった。しかし、筆者、学生共々それらに臨機応変に対応していき乗り越え、大事に至ることなくなんとか切り抜けることができた。オンラインによるデメリットは、多かれ少なかれあれども、学生はそれに臆することなく、何よりも真摯な姿勢で真面目に取り組んでくれたことで、よい学びが得られたのではないかと振り返る。

アフターコロナにおいても、教育法Ⅰの指導過程で、今学期、努めて工夫した「パワーポイントの提示法」や「学生とのメールでの対話や伝達法」「電子媒体による資料の提示」などを対面授業においても柔軟に取り入れながら、よりよい学びが提供できるような工夫をさらに探究し続けていく所存である。

## 参考文献

齊藤 忠彦

2020 「指導内容」中等科音楽教育研究会（編）2020『改訂版 最新 中等科音楽教育法』  
東京：音楽之友社：16-19

宮下 俊也

2020 「評価」中等科音楽教育研究会（編）2020『改訂版 最新 中等科音楽教育法』  
東京：音楽之友社：32-35

八木 正一

2020 聖徳大学音楽学部「授業開始への対応について」 学部長補佐通知文

まつい たかお（音楽教育）